

平成10年度 汽水域研究センター研究員・客員研究員

汽水域研究センター研究員（学部・課題別）一覧表

（平成10年3月31日現在）

法文学部（研究員13名）		
職名	氏名	研究課題
教授	鬼頭 宏一	湖沼水質保全条例をめぐる問題 *
"	岡崎 勝彦	地方自治行政と法的諸問題
"	杉元 邦太郎	山陰地方諸地域の存立基盤 *
"	田中 義昭	山陰地方における原始・古代集落の研究 *
"	喜多村 正	出雲地域における民俗と地域性
"	田坂 郁夫	都市気候に対する湖の影響
"	竹永 三男	宍道湖・中海沿岸地域の社会文化環境に関する歴史的研究
"	酒井 董美	山陰地方の口承文芸 *
"	蘆田 耕一	神社奉納和歌集の研究
助教授	堤 研二	山陰地域の地域特性の研究
"	田中 則雄	山陰地方藩政時代における文学・思想
"	金山 富美	日仏（欧）文化交流
助手	會下 和宏	山陰低質地遺跡の研究

教育学部（研究員10名）		
職名	氏名	研究課題
教授	三保 忠夫	「島根県内農具図解」の研究
"	林 正久	中国地方のテフラと地形発達
"	坂本 一光	自然環境教育において水を主題とする意義
"	山本 真一	汽水域の生活経済
"	銭本 健二	ラフカディオ・ハーン研究
"	野村 律夫	中型ベントスの生態・古生態および中海・宍道湖の環境解析
助教授	山崎 亮	山陰地方の「民間信仰」研究
"	大谷 修司	宍道湖・中海の藻類プランクトンの分類学的研究
"	新井 映子	微量金属元素給源としてのシジミ貝殻利用技術の開発
講師	角 替敏昭	山陰地域の高温低圧型変成岩の成因について

総合理工学部（研究員9名）		
職名	氏名	研究課題
教授	山内 靖喜	宍道湖・中海周辺の中新世以降の構造運動
"	高須 晃	汽水域基盤構成岩石の研究
"	赤坂 正秀	山陰グリーンタフ地域における金属鉱床
"	小室 裕明	中海・宍道湖周辺の火山活動
助教授	亀井 健史	汽水域における地盤工学的特性の解明に関する研究
"	中山 勝博	汽水湖に流入する河川の堆積過程及びその堆積物の層序
講師	三瓶 良和	中海・宍道湖の環境変遷に関する研究
助手	大平 寛人	非海成堆積盆の熱履歴評価
助手	瀬戸 浩二	宍道湖・中海における底生有孔虫の研究

生物資源科学部（研究員26名）

職名	氏名	研究課題
教授	山本 廣基	土壌生態系における農薬の環境影響評価
"	相崎 守弘	湖沼の流域管理と水質改善手法に関する研究
"	片桐 成夫	斐伊川流域の森林の物質循環に関する研究
"	若月 利之	汽水湖の水質・底質と集水域の土壌特性
"	井口 隆史	過疎・高齢化と中山間地域振興
"	梶村 光男	日本海南西部に於ける海藻の分類学的ならびに生物地理学的研究 *
助教授	澤 真知子	汽水域における種分化機構の研究
"	金子 信博	土壌生態系における種間相互作用
"	小池 浩一郎	斐伊川水系の森林統合情報システム
"	渡部 晴基	農山村過疎地域における地域産業複合化に関する研究
"	伊藤 勝久	源流域地域における農林業生産の社会及び自然環境に対する影響
"	新村 義昭	山地小流域における森林水文条件の研究
"	藤居 良夫	山陰地域における環境の予測と評価に関する研究
"	武田 育郎	集水域における水質水文環境
"	星川 和夫	水生昆虫の塩分耐性
講師	小池 文人	汽水域における生物群集の研究
"	秋葉 道宏	ヨシ湿地の創出技術に関する研究
"	佐藤 利夫	汽水・海水圏における微生物相の変動について
"	宇津田 嘉弘	汽水域における野鳥等の生息実態とその特性について
"	大森 賢一	地域経済のモデル化とシュミレーション
"	杵村 喜則	山陰地方の植生と植物相についての研究
助手	高 畠 育雄	河川・汽水域における魚類行動
"	巢山 弘介	汽水域における微生物の生態
"	山本 伸幸	森林の適切な利用・管理のための統計システムの確立
"	鹿取 悦子	斐伊川流域における資源管理と農山村経営に関する研究
"	山下 多聞	島根県地方における森林資源の保全に関する研究

合計58名

（4月1日以降継続の場合）
任期：平成12年3月31日
（注）研究課題中に*印がある者の任期は平成11年3月31日まで

汽水域研究センター客員研究員一覧表

平成10年3月31日現在

氏 名	所	共同研究のテーマ
斎藤 文 紀	通商産業省工業技術院地質調査所海洋地質部 主任研究官	中海・宍道湖の形成史の研究（徳岡 隆夫）
井内 美 郎	通商産業省工業技術院地質調査所海洋地質部 主任研究官	中海・宍道湖の形成史の研究（徳岡 隆夫）
西村 清 和	通商産業省工業技術院地質調査所海洋地質部 主任研究官	中海・宍道湖の音波探査法の開発（徳岡 隆夫）
廣 邊 真 澄	通商産業省工業技術院地質調査所海洋地質部 研究員	生物による水質浄化システムの構築（國井 秀伸）
岩 熊 敏 夫	総理府国立環境研究所生物圏環境部長	生物による水質浄化システムの構築（國井 秀伸）
野 原 精 一	総理府国立環境研究所生態機構研究室主任研究員	水辺の景觀に果たす水生植物の役割（國井 秀伸）
貞 方 昇	北海道教育大学教育学部函館分校教授	汽水湖の形成と環境変化に関する研究（高安 克己）
箕 浦 幸 治	東北大学大学院理学研究科助教授	汽水湖の形成と環境変化に関する研究（高安 克己）
福 原 晴 夫	新潟大学教育学部教授	生物による水質浄化システムの構築（國井 秀伸）
小 林 巖 雄	新潟大学理学部地球鉱物学科教授	汽水棲貝類の生態と殻体形成との関係について（高安 克己）
土 谷 岳 令	千葉大学理学部助手	水辺の景觀に果たす水生植物の役割（國井 秀伸）
山 口 佳 昭	信州大学理学部地質学科教授	山陰地域の金属鉱床の構成鉱物と鉱化作用（赤坂 正秀）
沖 野 外 輝夫	信州大学理学部教授（理学部附属諏訪臨湖実験所長）	生物による水質浄化システムの構築（國井 秀伸）
中 本 忠 信	信州大学繊維学部教授	生物による水質浄化システムの構築（國井 秀伸）
公 文 富士夫	信州大学理学部地質学科助教授	汽水湖の形成と環境変化に関する研究（高安 克己）
新 妻 信 明	静岡大学理学部地球科学科教授	汽水湖の形成と環境変化に関する研究（高安 克己）
松 本 英 二	名古屋大学大気水圏科学研究所教授	汽水湖の形成と環境変化（徳岡 隆夫）
山 内 克 典	岐阜大学教育学部教授	長良川における塩水遡上と汽水域生態系の研究（徳岡 隆夫）
田 崎 和 江	金沢大学大学院自然科学研究科教授	水圏における微生物による自浄作用の研究（飯泉 滋）
平 井 幸 弘	愛媛大学教育学部助教授	汽水湖の形成と環境変化に関する研究（高安 克己）
赤 木 三 郎	鳥取大学教育学部教授	湖山池の自然環境学術調査（高安 克己）
西 田 良 平	鳥取大学工学部教授	湖山池の自然環境学術調査（高安 克己）
坂 本 巖	島根医科大学医学部助教授	ヤマトシジミの生態学的研究（高安 克己）
宮 田 雄一郎	山口大学理学部助教授	中海，飯梨川河口のマッドランプ（徳岡 隆夫）
鹿 島 薫	九州大学理学部助教授	汽水湖の形成と環境変化に関する研究（高安 克己）

氏 名	所 属	共同研究のテーマ
吉 川 周 作	大阪市立大学理学部助教授	完新統の火山灰層序（中山 勝博）
古 山 勝 彦	大阪市立大学理学部助教授	中国・山陰地域の第四紀玄武岩類の地質学・岩石学的研究（高須 晃）
福 沢 仁 之	東京都立大学理学部助教授	汽水湖堆積物の高精度分析（高安 克己）
益 田 芳 樹	川崎医科大学講師	汽水カイメン（宍道湖・中海に生息するカイメン）の生活史に関する研究（松野 煒）
中 島 拓 男	滋賀県琵琶湖研究所総括研究員	生物による水質浄化システムの構築（國井 秀伸）
勝 部 昭	島根県教育庁文化財課長	山陰の低湿地遺跡の研究（徳岡 隆夫）
西 尾 克 己	島根県教育庁文化財課主幹	山陰の低湿地遺跡の研究（徳岡 隆夫）
平 野 芳 英	島根県立八雲立つ風土記の丘資料館管理課学芸主任	汽水域の考古学的研究（竹廣 文明）
赤 澤 秀 則	鹿島町教育委員会主任主事	汽水域の考古学的研究（竹廣 文明）
淀 江 賢一郎	財団法人島根県民会館主幹	汽水域の水生昆虫の分布・生態に関する研究（高安 克己）
須 崎 聡	千本電機㈱技術開発部取締役	中海・宍道湖の音波探査法の開発（徳岡 隆夫）
安 間 恵	川崎地質㈱海洋調査部長	中海・宍道湖の音波探査法の開発（徳岡 隆夫）
渡 邊 正 己	川崎地質㈱関西支社微化石分析所課長	汽水域沿岸遺跡の古環境復元（高安 克己）
田 中 隆 二	広島市立大学国際学部教授	日仏（欧）文化交流（金山 富美）
尾 原 和 夫	島根県立大社高等学校教諭	宍道湖・中海集水域の昆虫群集による環境評価（星川 和夫）
神 谷 要	㈱中海水鳥国際交流基金財団 指導員	汽水域の水生植物相（國井 秀伸）
森 忠 洋	な し	生物による水質浄化システムの構築（國井 秀伸）
田 中 善 蔵	な し	湖山池の自然環境学術調査（高安 克己）
坂之上 一	な し	中海・宍道湖周辺域の古環境変遷（高安 克己）
松 井 整 司	な し	山陰地域の火山活動史（山内 靖喜）
浜 田 周 作	な し	異常気象と堆積作用の関連（山内 靖喜）
生 嶋 功	な し	水辺の景觀に果たす水生植物の役割（國井 秀伸）
西 條 八 束	な し	汽水域の生態系に及ぼす人為的改変の影響（國井 秀伸）
中 尾 繁	北海道大学水産学部教授	塩分傾斜に伴う動物相の変化（高安 克己）
中 村 幹 雄	島根県水産試験場三刀屋内水面分場長	中海・宍道湖の生態学的研究（高安 克己）

氏 名	所 属	共同研究のテーマ
松 井 章	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター主任研究官	汽水域における環境変化と人間活動史の研究 (竹廣 文明)
服 部 旦	大妻女子大学文学部教授	『出雲国風土記』島根半島部 (島根郡、秋鹿郡、楯縫郡、出雲郡) における海浜・淡水域・汽水域水系の研究 (蘆田 耕一)
田 中 里 志	京都教育大学助手	新生代後期の気候変動と海面変化 (高安 克巳)
西 城 潔	宮城教育大学助教授	新生代後期の気候変動と海面変化 (高安 克巳)
佐 藤 仁 志	島根県立三瓶自然館指導課長	汽水域に於ける野鳥等の生息実態とその特性について (宇津田 嘉弘)
景 山 初 美	な し	汽水域に於ける野鳥等の生息実態とその特性について (宇津田 嘉弘)
野 津 和 功	鳥取女子短期大学助教授	中山間地域の現状と振興方策に関する実証的研究 (井口 隆史)
越 川 敏 樹	安来市立南小学校教頭	宍道湖・中海の水生生物相及び生態 (國井 秀伸)
中 村 唯 史	日新技術コンサルタント	山陰汽水域の自然史復元 (徳岡 隆夫)
水 口 憲 哉	東京水産大学助教授	中海・宍道湖の環境保測の全と水産振興 (徳岡 隆夫)
東 幹 夫	長崎大学教育学部教授	中海の生物生産に関する研究 (徳岡 隆夫)
伊 達 善 夫	な し	中海・宍道湖の水質予測の研究 (徳岡 隆夫)
宮 田 逸 夫	な し	山陰地域の植生に関する研究
沢 野 伸 浩	星稜女子短期大学講師	汽水域の汚濁負荷と環境改善 (徳岡 隆夫)
吉 田 充 夫	ジオサイエンス (株) 環境分析センター長	ヘドロに含まれる重金属の効率的固定に関する研究 (高安克巳)
湊 秀 雄	な し	ヘドロに含まれる重金属の効率的固定に関する研究 (高安克巳)

編集後記

LAGUNA (汽水域研究) No.5 はいつになく分厚いものになりました。本号に掲載された論文の多くは、平成7～9年度文部省科学研究費補助金・基盤研究 A(1)「海跡湖堆積物からみた汽水域の環境変化－その地域性と一般性－」(代表；高安克巳)の研究成果報告を兼ねたものですが、もちろん、それ以外の論文もあり、様々な視点から環境変化に敏感に反応する汽水域の環境特性が論じられています。汽水域研究は今後、ますます多岐にわたり展開されていくものと思われます。次号も様々な分野の関連研究成果を積極的に掲載していく予定ですので、よろしくご協力下さい。

LAGUNA (汽水域研究)

編集要項

1. LAGUNA (汽水域研究) は、島根大学汽水域研究センターにおいて、年1回発行する。
2. 本誌には、本センターの専任研究部門と共同研究部門の教官、研究員、客員研究員、および編集委員会が特に認めた者が投稿することができる。
3. 編集委員には本センターの専任教官があたる。
4. 本誌の内容は、原著論文 (original article)、短報 (short note)、資料・解説 (review) など、広く汽水域に関わるもの、および本センターの活動に関わるものとする。
5. 執筆者は次項の執筆要項に従うものとする。
6. 投稿原稿の掲載の可否については、関連する研究者の査読を経た後に、編集委員会が決定する。
7. 別刷は50部を本センターの経費から負担する。

執筆要項

1. 投稿原稿の本文の用語は日本語または英語とする。原稿の長さについては特に規定しないが、大部の場合は編集委員が縮小を要求する場合もある。
2. 原稿はできるだけワープロを使用することとする。その場合、1行23文字 (半角46字)、1ページ23行、上下左右のマージンを2.5cm以上空けること。句読点は“,”と“.”を用いること。また、文字指定はプリントアウトした原稿に行い、ワープロ原稿には特殊文字を用いないこと。
手書き原稿の場合は、400字詰めA4版横書き原稿用紙を用いること。
なお、刷り上がり1ページは、横書き1行23字、46行の2段組 (約2,100字) を基本とする。
3. 数字はアラビア数字、生物和名はカタカナを用い、学名はイタリック指定のこと。時間、濃度、速度などを表す場合には、SI単位を用いること。

4. 報文の構成は以下の通りとする。
日本語原稿の場合：表題、著者名・所属、英文表題、英文著者名・所属、英文摘要 (Abstract, 200語以内程度)、英文キーワード (アルファベット順に5語以内)、本文、謝辞、引用文献。
英語原稿の場合：表題、著者名・所属、日本語表題、日本語摘要、キーワード、本文、謝辞、引用文献。
原稿の第1枚目は表紙とし、その上半部には表題から英文所属までを書く。原稿第2枚目には摘要とキーワードを書き、本文は第3枚目から始める。表紙を含め、通しページ番号を打つこと。
5. 本文中での文献の引用は次の例に従う。また、3名以上のものについては、「・・・ほか」または「・・・et al.」とする。
・・・山田・松井 (1993) は宍道湖・中海の魚類について・・・
・・・and Avise et al. (1987) speculate that this may have arisen from・・・
・・・植物生態学分野について記述している (吉田, 1992; 佐藤, 1993)。